

百歳訪問

中津市長 奥塚 正典

百歳を迎えられた方をお祝いのため訪問します。一世紀を生き抜いて今なお元気であるばかりか、その経験や人生観に教えられることがあります。先日自宅に訪ねた男性は、百歳まで生きられていることへの感謝を口にした後、意外なことを語りました。

一人だから幸せだと言うのです。すべて自分の意志で事を決め、結果がどうなっても責任は自分で負えばよい。人を憎むこともうらやむこともないし欲も出ない。自己決定・自己責任の人生が一番だということです。一人暮らしをさみしいとは思わず前向きにとらえています。20 数年前に亡くなった奥様への愛情表現も細やかで、「亡くなった時、本当にきれいな顔だった。涙が出ないくらい」と文学者のようです。陶芸、絵画を嗜み^{たしな}できるだけ自立した生活を送ることを信条とされています。稀有の強さ^{けう}とその気概に感服です。

一方、施設に入所し二人の歳を合わせると来年二百歳となるご夫妻。文字どおり「お前百までわしゃ九十九まで共に白髪^{けう}の生えるまで」のめでたい長寿です。ご主人は 60 歳を過ぎからサイクリングを始め、おかげで足腰が鍛えられ百歳でも歩けると感謝し玄関の外まで出てきてくれました。今年 99 歳を迎える奥様と仲良く過ごされています。お二人はいつもどんな会話を交わすのでしょうか。

高齢になると人により年齢の重ね方、体調、日々の生活は様々です。今百歳を迎えられている方々は私の両親と同年代、時々同級生の親御さんに会うこともあります。80 代で同じ年



に他界した私の両親も生きていれば百歳、ふと生前の姿が頭をよぎります。実家に帰るたびに「体に気をつけて。子どもは元気か。また帰っておいで。」と決まったように言って見送ってくれた父母。「ありがとう。今は中津に帰っていますよ。」